
とある戦国の武将達

戦李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦国の武将達

【Nコード】

N5910X

【作者名】

戦李

【あらすじ】

多重能力。理論上では不可能とされている幾多もの能力を操る能力のこと。しかし、この能力を使う唯一の人間・多重能力者がいた！彼は人知れずに多重能力者として犯罪者達を捕まえ学園都市の都市伝説に名を上げていた。そんなある日、彼の通う学校の学生寮の部屋に別の戦国から1人の忍が現れる。これが彼と彼の仲間達と世界を巻き込む新たな事件の幕開けだった！

戦国武将と魔術、科学、そして多重能力者と言う異端者が交わるとき物語は始まるっ…！！

イレギュラー

プロローグ 多重能力者と蒼天疾駆

俺は伊達勇次^{だて ゆうじ}。

学園都市のある高校に通う普通の学生だ。

さて、俺は普通に帰ってきて普通にリビングに入ったはずだったのだが…

何故、迷彩の格好をした人にクナイを当てられてるのかな？

「で、どうやって俺様をここに連れてきたわけ？しかもアンタ、竜の旦那と同じ姿だけど？」

ああ、上条。俺は今ほどお前のこのセリフが似合う場面に出くわすとは思わなかったよ…

「ふ、ふ、ふ、不幸だあああああああ！…！！！」

「うおお！？」

迷彩が怯んだ！今だ！

俺は能力を発動する。頭の中で演算を素早くし^{テレキネシス}念動能力を発動！
迷彩の動きを封じた。

「何これ！？体が…！」

「俺の能力、^{テレキネシス}念動能力だ。下手したら心臓も止めちゃうけど？それが嫌だったら動かないでほしいんだけどなあ？」

「っ…！アンタ、術者だったんだ。」

はい？

この迷彩お兄さんは何を言ってるのかな？

「術者…？俺は能力者だぜ？わかるだろ？」

「のーりよくしゃ？」

「え？知らない？いやいや、ありえないっしょ。超能力を使う人のことだよ？……まさか、学園都市も知らないとか？」

嫌な予感がしたのでちよつと聞いてみる。

「がくえんとし？ちよつとうりよく？」

はい、ビンゴー！

マジで知らなかったようだよ？

っーか嘘！？知らない！？学園都市を！？

「が、学園都市を知らない？嘘だろ！？じゃあどつやって都市の中に入ってきたんだよ！？」

「アンタが連れて来たんでしょ？」

「いやいやいやいや、勘違いすんなよ。アンタがこの部屋に勝手に入って…って、話し噛み合わねえ…！」

ダメだ。サイコメトリー読心能力を使って俺は迷彩お兄さんの心を読んでみる。

「っー！？」

「ああ、大丈夫。危害加えないんで。」

俺はお兄さんの額に触れる。

戦国

戦

忍

武田軍

様々な記憶が俺に流れ込んでくる。

「……状況把握はできた。ここはアンタのいた世界とは別の世界だよ。佐助お兄さん？」

「な、何で俺様の名前を!？」

「簡単さ。俺は読心能力者。サイコメトラーアンタの記憶を見ただけ。」

「さいこめとらー?」

「つまりは……相手の心に触れるだけで読み取れる力を持つ人間ってこと。」

俺はカーテンを開ける。

「っ!?!?!?」

「猿飛佐助さん！異世界の戦国からよーこそ、この学園都市に！」

佐助お兄さんは外の光景を見てビックリしている。

「これで信じられる？ここが自分がいた世界とは別世界だってこと。しかも未来だってことを。」

「……一つ聞いていい？」

「何？」

「俺様はどうやったら戻れるかわかる？」

あー、そういう質問か。

まあ、いろんな人に会って戦ってってやって来たからな。

「わからない。けど、そーゆうの詳しいやつとかいるから聞いてくけど？あ、元の世界に帰れるまで俺の家に泊まれ。」

「そっか。って良いの？」

「もち。っーかそれしかないっしょ。生きてくためには。」

「礼は言うておくよ。アンタのことはまだ信じられないけどね。」

ああ、そうかいそうかい。

「まあ、忍らしいからな。そりゃ仕方がない。」

「俺様は佐助。猿飛佐助。これからよろしく。」

「俺は伊達勇次。普段は発火能力者^{バイロキネシスト}って認識されてるけど本当は多^デ重能力者^{ユアルスキラー}だ。」

第1話 買い物とハイジャック

さて、佐助兄さんは俺の家に暮らすことになった。
これからの方針は…

? 選択! 佐助兄さんの服

? この世界の常識説明タイム

? お買い物タイム

うん。この3つだな。

俺は今後の方針を決めるとすぐさまタンスから佐助兄さんのサイズに合いそうな服を取り出す。
とりあえずこの服に着替えてもらって…

「はいバンザイ!」

……反応無しっすか。

まあまだ警戒されてるわけだ。

「おりゃ!」

俺は能力使って佐助兄さんを拘束。

そして空間移動テレポルトを使って服を一瞬で脱がし代わりの服を着させる。
いやはや、便利便利。

次は迷彩のバンダナを額当てと取り替えて…
完了!

「おし。着替え完了。さてと…次はこの世界の常識を説明するぞ。」

俺は佐助兄さんをイスに座らせる。

「この世界ではまず戦がない。いたって平和だ。だから武器とか持つてたら即、警備員アンチスキルつていうのに捕まる。」

「それって武器持つちゃいけないの？危険じゃないかな？」

「まあ、この街には常識はずれがいるからな。クナイ1本は持つて本当に危険なときだけ使え。」

俺は他の武器は持つちゃダメと言う。佐助兄さんはクナイをちゃんと懐に仕舞った。

「そしてこの街では能力開発というのが行われている。学校…学問を勉強する場所で学問の一環として取り入れられている。さっき、佐助兄さんを拘束したのが超能力。これは才能の問題でもあるんだけどな。そして…能力はいくつも種類があつて本来なら1人1つしか持てないものだ。けど…俺はちよつと特殊だな。能力をいくつも使える。このことは他言無用だ。」

「何でさ？」

「本来俺みたいなのは理論上不可能とされている。けど、そんなのが本当に現実にいたらどうする？俺は間違いなく実験材料にされ酷い目に合わされる。」

「わかった。他言無用だね。」

佐助兄さんはわかってくれたようでよかったですよ。まっ、こちらそれ以外にもレベル6だって秘密もあるんだけどね…

「じゃあ、これから生活用品買いに行くからなー。」

俺は玄関に行き靴を履く。

佐助兄さんも靴を履いてくれた。

佐助兄さんって今の服装、迷彩のバンドナに黒いTシャツ、ジーパ
ンだしイケメンだし…目立ちまくるよなあ。

俺は佐助兄さんの美貌で商店街のオバちゃんに値引きしてもらおう
と企んでいた。

「何か企んでる？」

「オバちゃんに夕食の材料を値引きしてもらおうと思ってたんだよ。」

さすがに佐助兄さんの美貌を使つてとかは言わない。
言ったら殺されるやもしれん…！

「さて、ショッピングモールにつきやしたー！」

つと、俺は今現在ここで俺の持つてる『コネ』の1つを使って佐助
兄さんの住民票を作ってもらおうと思いたち携帯で交渉中。

「つーわけでヨロピクー」

交渉成立！

俺の持つてる『コネ』ってかなり役立つな

「さて、佐助兄さんの服を買おう！」

俺はタタタツと洋服売り場に佐助兄さんを連れて行く。

「そーいえばさ、勇次君は何で俺様のこと兄さんって呼ぶの？」

「え？俺より年上だからに決まってるじゃん。」

「そーゆうものなの？」

「そーゆうものなの。」

さすが戦国時代。価値観が違いますな。

「あ、佐助兄さんにはこれ似合いそう。ホイッと。」

俺は佐助兄さんの持つてるカゴに服を入れる。

「後はこれとこれとあと靴下つと。」

俺はポイポイっと服を選んで入れていく。

サイズ？とつくのとうに測りましたとも。

「さて、服選びは終わったので次は用品選びだなー。」

俺達は服の入った袋を持つと生活用品売り場に行く。

荷物は佐助兄さんが半分もってくれてるから楽チン楽チン生活用品売り場に来たぜー。

「歯ブラシ、コップにお皿に弁当箱ー 後パジャマに枕ー」

これらの物を買った後、俺達は上の階にできたカフェにやって来た。

「佐助兄さん、この後ゲームセンターに行きたいんだけど付き合ってくれる？」

「げーむせんたー？どついう所？」

「遊びに行くところだよ。」

俺はチョコレートパフェとジュース、佐助兄さんのも同じ物を頼んだ。
そこに…

ドッゴーン！…！

『このシヨッピングモールは俺達が制圧した！客は全員その場を動くんじゃねえ！』

そんな放送がした後カフェに重火器を持ち顔を隠した男達が入って来た。

ハイジャック…か。

「メンドクサイなあ…」

うん。本当に…

俺はクナイを取り出そうとした佐助兄さんを抑えた。

「ここで変な動きを見せたら他の人が危ない。」

「じゃあ、どうするのか…!?!」

「大丈夫。俺に任せろ。」

まったく。

何でこうも面倒ごとに俺は巻き込まれやすいんだろうかね…

まっ、俺の休日を邪魔したんだ。泣いて許しを貰おうとしても…

「許さないから…」

第1話 買い物とハイジャック（後書き）

今回はこの小説初の戦闘シーンとあるシリーズの原作キャラが登場します。

その前に登場人物紹介が入るやも…

第2話 ハイジャック犯アンチと新たな来訪者！って、早くね？

「全員動くんじゃないやねえ！撃つぞ！」

銃を持ちながら試しに蛍光灯を割るハイジャック犯。
それに悲鳴をあげる客。

「さて…佐助兄。」

「何か略されてない？」

「こつちのほうがいいから。手を繋いでおいて。」

「え？」

俺は佐助兄の手を掴むと空間移動テレポートで屋上に飛んだ。

「とっ。」

「完了。ハイジャック犯はいないな。」

俺はリュックから先ほど買った佐助兄の服のうち1枚…緑のパーカーと黒の帽子を取り出し佐助兄に渡す。

「上から着りゃいいよ。俺も！」

俺はリュックから青のパーカーと白の帽子を取り出し着用する。
帽子を深く被りパーカーのフードを被る。

同じように佐助兄に帽子を深く被らせた。

「これでいい。」

「そーいえば、何でさっきから俺様の手を握ってるのかな？」

「ん？ここ防犯カメラがあるから俺の電撃使用エレクトロマスターの能力を使って佐助兄と俺の姿見えないようにしてんの。詳しくは帰ってから説明すわ。」

「了解。それで、これからどうすんの？」

「ちょっと待ってて。」

俺は佐助兄を引っ張って防犯カメラの死角に入り右目を覆う包帯を解く。

「潰れてる訳じゃないの？」

「うん。ただ…お見せするにはちよおつとね…。」

俺は右目を開く。

右目は真っ赤に染まり白目や黒目なんかありゃしない。

あるのは黒い線で描かれた五方星の魔方陣のみ。

「っ…！これは…！」

医療用眼帯だと激しく動いたとき外れやすいし（実際ビリビリ中学生との戦いで外れてビリビリ中学生に見られ引かれた）俺は包帯を巻いている。

「…神の瞳を受け継ぎし者、伊達勇次が告ぐ。財宝門ゲートから私の求めし武器を召喚せよ…」

魔方陣が輝き屋上の床に緑色の銅の門が現れる。

俺はその門を目の前に現れた鍵を使って開けた。

中に手を突っ込むと佐助兄の武器が俺の手に握られていた。

俺が手を引っ込めると門が閉じ、消え去る。

「な、何なのさ今の？」

「魔術だよ。俺の右目は神の瞳って言うの。この瞳さえあればどんな高等魔術でも使える。自分で魔術を創ることもできる。俺にとっちゃ、忌々しい右目だけだね。ほら、これで戦える？」

俺は取り出した武器を佐助兄に渡す。

「うん。十分だ！」

「じゃあ、ハイジャック犯達をぶっ飛ばしに行きますか！」

俺は再び空間移動テレポートで今度はコンピューター売り場に行く。

「つーか電化製品売り場だな。」

「よし、ハイジャック犯はまだここまで来てない。周りに人もいないし…やるか！」

俺はコンピューターのコンセントを繋いで能力でハッキングする。エレクトロマスター

「見取り図は覚えた。次は監視カメラ…っと。」

コンピューターに監視カメラの映像が映る。

「上に3人。下の階にあわせて15人。」

「合計18人ではいじゃくつてやつなんでしょ？楽勝だね。」

「いや、人質がいるよ。やっぱ1人じゃ無理なのか…」

「つまり、人手がいるってわけ？」

俺達は突然聞こえた声に振り向く。

「み、御坂！？」

「久しぶりね。すぐにでもアンタと戦りたいところだけど…手伝えることがあったら言つてよ。」

「助かるよ。」

ときわだい 常盤台の レールガン 超電磁法、みさか 御坂 みこと 美琴がいればかなり心強い。

「まずは一般人の安全が優先だ。だから、佐助兄！もしかして…分身の術とかできたり…」

「できるよ〜」

「よっしゃ！じゃあ分身の術でまず…」

俺は2人に作戦を伝える。

「オツケー！」

「了解！」

「じゃあ、作戦スタート！」

俺達はそれぞれの場所に向かった。

「おつ、発見！」

俺はハイジャック犯の仲間の1人を見つける。

「テレキネシス念動能力……」

俺は動きを止めると即、テレポート空間移動でハイジャック犯Aの背後に回りこみ手刀をうった。

「ぐうっ！」

「はい、終了。」

気絶したハイジャック犯Aを魔術で作り上げた空間、無限牢に縛って放り入れた。

「後は……」

エレクトロマスター電撃使いを使って防犯カメラから姿を消す。

そして、テレキネシス念動能力でエレベーターのボタンを押すとすぐに中に入り、エレベーターの天井上に隠れた。

「さて、このまま頭を叩きに行きますか…」

俺はそう呟くと一番上の階でエレベーターを降りた。

制御室に入ると…わあ、何か赤い人と青い人、茶色の人がいるなあ。てか、服装変だわ。佐助兄さんの知り合い？

「あぁっとお…お邪魔します。」

「な、何だテメエ！」

ハイジャック犯Bが銃を向けてくる。

俺は銃弾を電撃で打ち落とした。

「な!?!」

「テレキネシス
念動能力!」

ハイジャック犯が全員床に沈められる。

「お、お前、都市伝説のデュアルスキラー多重能力者か!?!」

「ご名答。このハイジャックを止めさせに来ました!。」

パリパリッ!

「ちょぉっと気絶してもらっわ〜」

「あー納得。ってするわけないでしょ！」

おお、ノリツツコミ！

初めて見ましたぞノリツツコミ！

「佐助兄さん忍者止めてお笑い芸人でもやれば？」

「嫌だよ！」

「チツ、あービリビリー！」

「ビリビリ言うな！」

だって上条が言ったから俺も呼んでるんだよ？

「1度家に帰ってからバトローゼー。」

「いいわよ。逃げんじやないわよ！」

「OK〜。じゃあ、後はヨロピク〜。」

俺は無限牢からハイジャック犯達を出すとその場から空間移動テレポートで家に戻った。

その後、すぐに荷物とって再び戻ったよ
ビリビリの怒鳴り声？

H A H A H A H A、ナンノコトヤラ。

勇次

「で、再び状況説明ですよー。」

佐助

「誰に向かって話してんのぞ。」

勇次

「ん？読者の皆様。」

佐助

「医者に行って来なさい。」

第3話 再び状況説明 黒勇次登場！？

俺達はテーブルを挟んで向かい合っている。
俺はお茶を出したあと、佐助兄の横に座った。

「で、佐助兄。」

「あ、呼び方戻ってる。」

「この人達はどちら様で？」

「こつちが俺の主人の真田よ、いや、もうとっくに頭覗いて知ってる。」じゃあ何で聞いたの！？」

「ハハハハハ、確認をね。あ、俺は伊達勇次です！能力は発火能力バイロキネシスの他にいろいろと持ってます！」

俺が手を挙げて自己紹介をする。

「ああ、彼、今は敵じゃないよ。俺様の恩人みたいなの？」

「あの流れじゃ普通こつなるだろ？」

まさに王道逆トリップだもんな。

「佐助の恩人でござるか！？某、真田源次郎幸村と申すもの！この度は佐助をお助けいただいたこと感謝します！」

「ああ！ちよ、あの、頭上げてください！俺そんなに偉くないです

から！むしろ庶民ですから！戦国の大名が俺なんかには頭下げちゃいけないですって！」

俺はとりあえず真田さんの頭を上げさせる。

「ええつと、佐助兄。頼んだ！」

「結局俺様任せなのね！」

佐助兄は渋々全員に説明した。

「と、言うわけでここは俺様達のいた世界じゃなくて別の戦国があった未来ってわけ。しかもここでは超能力っていう婆娑羅とは違う力の開発を学問の一環として取り入れている。当面の衣住食確保はできたけど…肝心なその提供者がまだ完全に信用できない。」

「佐助!？」

「仕方ないでしょ旦那。俺様はこういう性格なの。」

「…アイツも能力者なのか？」

伊達政宗さんが俺を見ている。

「そつ、しかも理論上じゃ不可能のいくつもの能力を使えるたじゆーのーりよくしゃってやつらしいよ。普段は隠してあるらしいけど、そついえば段階聞いてなかったな。勇次君、君の段階って何？」

「ん?」

俺は暇つぶしにやってた発火能力ハイロキネシスでの小さな太陽作りの手を止め佐助兄の方を向く。

「俺のレベル？俺はレベル6だけ。普段はレベル5だけだな。」

「6…？段階では確か5までだつて…」

「ああ、言つてなかつたつけ？俺は特別でレベル6つっーやつなの。」

「たしか段階の5が単独で軍と戦えるほどの力を持つ人間だな？じゃあ段階6はなんなんだ？」

「こじゅろーさんが聞いてくる。」

「神様。」

「「「はい？」「」」

「神の領域の能力者。それがレベル6。」

「はいいいいいいいい！?!?!?!」

佐助兄が叫んだ。

「つて、言われてる。俺は空間移動テレポートの能力をもつてても異世界を渡るなんてできない。神様ならそれくらいできるよ。だから俺はレベル6は神の領域の能力者なんて認めない。せいぜい人間最強がいいところだよ。」

「いやいやいやいや、待ってよ待ってよ段階が6？しかもそれが神様の領域？君ってどれだけ規格外なのさ！」

「規格外だから騒動によく巻き込まれるしこういうことにも慣れてんの。」

よかったなー俺が騒動に巻き込まれてるおかげで信じてもらえてと言った後俺は再び太陽作りに集中する。

「ねえ、何作ってんの？」

「太陽。いや、戦国時代じゃ日輪って言うのかな？そのちっちゃい版。」

「もう何も言わないよ……」

佐助兄は俺がどれだけ規格外かを知り机に突っ伏す。

「君はさあ、もう人間止めていいと思うよ、うん。」

「もう止めてる自覚あるんで大丈夫。」

「何が大丈夫!？」

「いろいろと。あ、この家で生活することについて2つ言っておくことがある。この家じゃ敵味方主人従者忍び関係なし。みんな家族だ。1人の人間だ。それを踏まえてくれ。どうしても無理なら仕方ないけど止めるよ。俺は上下関係が嫌いだ。そして……」

俺は顔を上げてにっこりと笑う。

「家のものに限らず何か壊したら…怒るよ?」(マジユツテムゲンロ
ウニエイエンニトジコメルカ、シヌヨリコワイメニアワセルカラネ
?) (極悪黒笑)

「ハ、ハイ…」(ガクブルガクブル)「」

よし、出来た。次はビリビリとのバトルか。

あーあ、メンドクセエ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5910x/>

とある戦国の武将達

2011年12月7日06時48分発行